その抗生剤、本当に必要ですか？

健康通信

常陸大宮済生会病院　小児科部長　青柳　順

発熱や咳、鼻汁や腹痛（いわゆる“風邪”の症状）で病院を受診した時に、抗生剤（抗生物質）が処方されず、不安になったことはないでしょうか？抗生物質を飲めば、すぐに治るはずなのに... と。

また、熱が出た時には、自宅にある抗生物質を飲む方もいらっしゃるでしょう。もちろん、抗生物質が有効な病気もあります。いわゆる**“細菌”**感染症と言われ、小児や高齢者の気道感染症の原因菌である肺炎球菌等によるものです。しかし、実際の感染症のほとんどは抗生物質が効かない**“ウイルス”**感染症です。

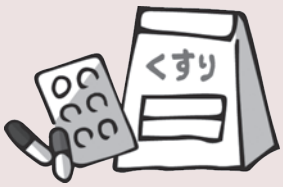
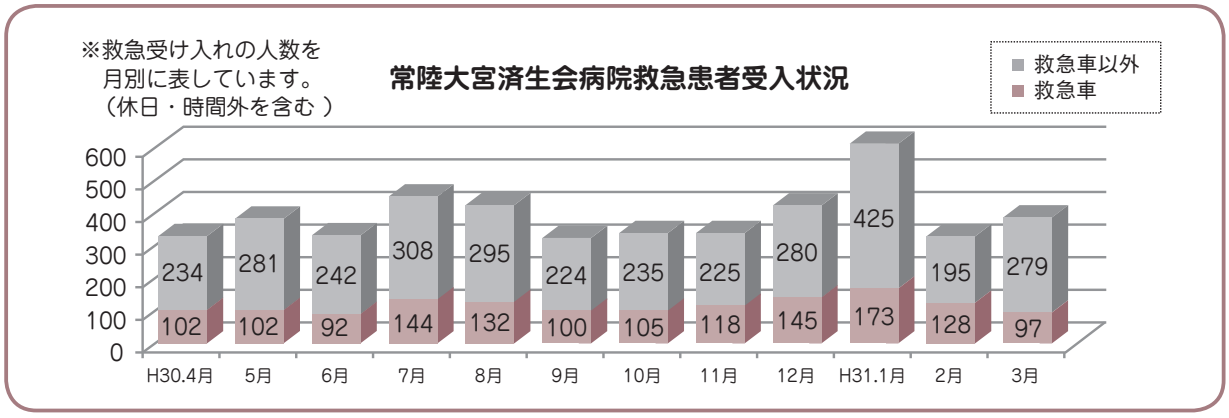
このウイルスに有効な薬剤は、有名なものでは抗インフルエンザ薬がありますが、抗生物質と比較すると少数です。いわゆる“風邪”の原因ウイルスは200種類以上ありますが、そのウイルスに有効な薬剤はありません。

これだけ医学が発展した現在でも、風邪の特効薬はなく、実は対症療法（咳嗽や鼻汁を抑えたり、水分補給）が主体なのです。しかし、時として細菌感染症にかかり、重篤な状態になることがあります。

Hib（ヒブ）や肺炎球菌の予防接種が普及し、重篤な**細菌**感染症の発症率は激減しましたが、0％にはなりません。こうなると抗生物質の出番ですが、近年、**“薬剤耐性菌”**が問題になっています。つまり、抗生物質の頻回または長期使用により、薬が効きづらい菌が増えてしまうことがあるのです。

特に小児期に抗生物質を頻回に内服し、菌の薬剤に対する耐性化が進めば、その子はこの先の長い人生を守ってくれるはずの武器（抗生物質）が少ないことになります。

誤解しないでください。“抗生物質を使用しないで !!”という意味では決してありません。的確に**細菌**感染症を診断して、短期間での使用であれば、とても有効です。

ペニシリンという抗生物質が発見されてから90年が経ち、そのおかげで多くの命が救われてきました。偉大な先人たちの発見による恩恵を永く享受するためにも、抗生物質とはうまく付き合っていきたいものです。

風邪をひいたときに、思い出してみてください。**“その抗生剤、本当に必要ですか？”**